近代社会と「健康の可視化」：生政治に基づく身体への近代的まなざし

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2020-02-10
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 川野, 佐江子, 松下, 友季栄
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://osaka-shoin.repo.nii.ac.jp/records/4429

近代社会と「健康の可視化」
―生政治に基づく身体への近代的まなざし―

学芸学部　化粧ファッション学科　川野佐江子
人間科学研究科　化粧ファッション学専攻　修了生　松下友季栄

要旨：本論では、我々は健康をどのように可視化してきたのかという、身体への近代的まなざしの有り様について検討する。まず、フーコーの生政治概念 Bio-politics を援用し、個人の身体的現象が国家の統治制度に組み込まれることで、個人の身体が共同体（国家）の視座から管理される対象になったことを論じる。次に、その生政治による統治は、衛生学的ユートピア思想を生じさせ、清潔や健康が「美」の概念―善きもの―と結びつくことで、たとえば優生学的理論などのイデオロギーとして我々の社会価値を方向付けることになったことを明らかかする。また、統計学を用いた「健康」の可視化、新しい健康施策の一案としての美容室の活用について論じる。以上を踏まえ、視覚メディアが社会価値を生み出すことになった近代以降の社会において、「健康」という肉体の問題は、人間の外見―可視化されたもの―の問題にすり替えられ、「美」という「社会善」として受け入れられていることを結論づける。

キーワード：身体、生政治、健康、可視化、美容室

はじめに

我々の日常を見渡せば、近年の社会的関心は人びとの健康に向けられていると言えるだろう。この「健康」の定義について、「世界保健機関憲章」[1] 前文から筆者によって抜粋したものが以下の通りである。なお、英文につづく（　）内の邦文は、公益社団法人日本 WHO 協会による仮訳である。

・*Health is a state of complete physical, mental and social well-being and not merely the absence of disease or infirmity.（健康とは、病気ではないとか、弱っていないということではなく、肉体的にも、精神的にも、そして社会的にも、すべてが満たされた状態にあることをいいます。）*

・*The enjoyment of the highest attainable standard of health is one of the fundamental rights of every human being without distinction of race, religion, political belief, economic or social condition.（人種、宗教、政治信条や経済的・社会的条件によって差別されることなく、最高水準の健康に恵まれることは、あらゆる人々にとっての基本的人権のひとつです。）*

・*The health of all peoples is fundamental to the attainment of peace and security and is dependent on the fullest co-operation of individuals and States.（世界中すべての人々が健康であることは、平和と安全を達成するための基礎であり、その成否は、個人と国家の全面的な協力が得られるかどうかにかかっています。）*

・*The achievement of any State in the promotion and protection of health is of value to all.（ひとつの国で健康の増進と保護を達成することができれば、その国のみならず世界全体にとっても有意義なことです。）*

・*Informed opinion and active co-operation on the part of the public are of the utmost importance in the improvement of the health of the people.（一般の市民が確かな見解をもって積極的に協力することは、人々の健康を向上させていくうえで最も重要なことです。）*

・*Governments have a responsibility for the health of their peoples which can be fulfilled only by the provision of adequate health and social measures.（各国政府には自国民の健康に対する責任があり、その責任を果たすためには、十分な健康対策と社会的施策を行わなければなりません。）*

ここで示されているのは、個人の健康はもはや個人

だけのものではなく、社会や国家といった全体と深く繋がる問題であるということである。健康であることは、個人にとっても社会全体にとっても、存在の根幹を成すものとして意味づけられ、その結果人々は健康であることに夢中である。とりわけ、現代社会においては、健康と美が強く結びつけられているように見える。この健康と美の結びつきは、近代以降のイデオロギーとして我々の日常を覆い尽くしているかのようである。本論では、我々はその関心事である健康をどのように可視化してきたのか、身体への近代的まなざしの有り様について論じていく。

1. 健康と衛生概念の発達

本論で現代の我々が健康に関心を持つことについて検証するとき、フーコーの「生政治 Bio-politics」の概念を援用していく。フーコーは「健康という政策の出現はもっと一般的なプロセスに関連づけられねばならない。それは、社会の「身体的満足感」を、政策の最も本質的な目的の一つとすることになるプロセスである。」（フーコー:1979.284.）と述べる。そしてこの十八世紀に明確になってきた「健康という政策」が持つ二つの動機（軸）について次のように述べる（下線筆者）。

> *病人を病人として引き受けることのできる装置の編成（この仕掛けとの関係において、<u>健康は復元されるべき状態、到達されるべき目標という意味をもつ</u>）。そして恒常的に住民の「健康状態」を観察し、計測し、改善することを可能にする仕掛けの整備。<u>その仕掛けの中での病気とは、諸要因の長期にわたる結果に依存するに変数でしかない</u>。*
> （フーコー:1979.288.）

このように 18 世紀以降の近代社会制度黎明期において、健康の問題は近代ヨーロッパの各国にとって重要な政策として取り上げられてきた。ここで重要なのは、下線で示した箇所のように、まず健康とは回復されねばならないこと、そして到達されねばならない目標であることとされた点である。つまり、健康とは「そうであらねばならないこと」として、一つの社会善の意味を含みながら国家制度の中に組み込まれていったという点である。そしてその結果、二つ目の下線が示すように、健康政策の中に用いられる様々な仕掛け―共同体としての医療体制の下、変数化された死亡率、平均寿命、伝染性疾患、風土性、栄養摂取、居住条件、子供の養育方法等の長期的観察と計測―によって、人々の身体は国家制度に管理される客体となっていった。

この健康政策仕掛けの発達の推進には、18～19 世紀当時の都市環境の劣悪さを改善することが政治上の喫緊の課題だったことにある。これは例えばパリについて、「ルイ・シュヴァリエは、こうした都市環境の全般的悪化と犯罪の日常化現象との相関を推定することで、十九世紀前半のフランス社会を理解するためには、人口統計学的方法が経済学的アプローチに劣らず重要なことを主張していた。彼によれば、死亡率、私生児率、犯罪率は、人口増加と比例関係にある」（北山:1991.25.）と分析された結果、「『不衛生都市―犯罪都市』、『汚い者』―『犯罪者』のテーゼは十九世紀以後の社会観を強く規定していくこと」（北山:1991.27.）になったという説明から理解できる。すなわち、社会は衛生的でなければならず、そのことは文字通り健康でなければならず、そうであることこそが善である、という社会価値が広く行き渡ることになったのである。またフーコーも「十八世紀における健康政策」の中で、健康政策は社会的安定や秩序を保障するだけでなく「公益」を保証するものであり、その手段は「公安」[2)]と呼ばれると述べている。こうした施策の中で、健康であることは社会的善として確立し、一方で個人的身体を社会的管理下におく一つのイデオロギーとして意味づけられていく。

2. 健康と美のイデオロギー

以上のように、近代とは、国家による個人的身体への介入が制度化された時代として指摘されるが、その際に中心となったのは医療体制の確立である。フーコーは「健康のための一般的技術としての医学は、病気に対するサービスや治療技術としての医学以上に、行政機関、つまり十八世紀を通してたえず拡大、確立していった権力装置の中で、ますます重要な場を閉めるようになっていく。」（フーコー:1979.294.）と指摘する。これらの動きをフーコーは「衛生の特権化と社会統制の審級としての医学の働き」（フーコー:1979.292-295.）と題して説明している。こうした医学とその体制とに結びついた“衛生の特権化”は、その先に衛生学的ユートピア思想を生じさせたことが指摘されている。北山は「衛生学の対象が、本来の意味での『汚物』だけでなく、『社会的汚物』、つまりモラルから見た『汚物』にまで拡張されてきた」（北山:1991.51.）ことを指摘し、「衣服・身体の汚れた人間」は「モラルの汚れた人間」として社会的に断罪され、さらには「衣服・身

体の汚れ」が「モラルの汚れ」と同一視されることに至ったことを説明する。

このことが何を示すのかと言えば、「清潔であること・衛生的であること」と、「そうではないこと」が、その共同体における善悪の明確な弁別になってしまったと言うことである。「衣服・身体の汚れ」は視覚メディア装置が大きく発達する19世紀において、文字通り目に見えて明確な人間弁別の方法になりえただろう。

ところで、先に述べた都市改造は、衛生問題対策に寄与しただけでなく、明るく安全な道路と広場を作り、ガラスを多用したショウウインドウを持った商店が並ぶ活気のある街並みを形成し、人々に豊かさの享受を実感させることにも繋がった。美しく清潔な衣服を身につけ、洗練された身のこなしで表現された人々の身体は街にあふれ、鏡、写真という新たな身体表象のツールの対象となり、ファッションプレートやファッション雑誌、ファッショングラビアという視覚メディアによって広く流通することになる。それら魅力的な衣服、魅力的な身体は、その前提として絶対的に清潔であり、衛生的であり、健康であることが求められた。つまり魅力的な衣服、魅力的な身体は、健康であることをアプリオリとして受け入れられていくことになる。

ところで、19世紀から20世紀初頭の女性服はコルセットによって支えられる衣服であり、深井は「服は女性の身体を支柱、すなわち内部構造としながら造形され」（深井:1999）た、と述べている。ところが、1910頃、ポール・ポワレ[3]のデザインによる女性服で「コルセットからの解放」が行われ、その斬新なスタイルが流行する。このポワレの新しい女性服は、その後の女性身体における美への向き合い方を方向付けたと言えるかもしれない。つまり、それまでコルセットによって“理想的な”女性美に形作られてきた身体は、自らコルセットに頼らない身体美を創出しなければならなくなったわけである。この時目指されることになった新しい身体の美的価値の一つが「健康美」であった。

近代における健康的身体について、橋本は「十八世紀後半に至って、血統に重きを置く貴族的な古い価値観は明らかに廃れはじめ、それに代わってブルジョワらの新たな『健康的な』―― 身体を〈硬く〉強化するという ―― 価値観が現れてきていた」（橋本:2018.50.）と指摘し、そのブルジョワ的新しい身体は「退廃的な軟弱さから、進歩的な強さへの移行。身体はいまや、個人が日々たゆまず積み重ねる努力と忍耐によって叩き上げて獲得すべき、徳性の表れとして捉えられるようになる」（橋本:2018.50.）と説明する。つまり、18世紀後半以降、台頭するブルジョワの価値観では、外見としての健康な身体を確保することは、内面としてのその人の徳性を見るためのツールとなる、ということになる。

この「健康的な身体」が「美的身体」と結びつく思想ついて論じたのは、原克『美女と機械―健康と美の大衆文化史』である。原は、英国の哲学者・社会学者ハーバート・スペンサー[4]の思想を取り上げる。原はスペンサーの『社会静学』（1851）の結論を「『理想的な美しさ』とは『精神的優越性』の『表象（プレゼント）』に他ならない。と同時に、『身体的な醜さ』とは『精神的な劣等性』の『表象』に他ならない。外部の美しさは内部の優秀さを示しているのであり、外部の醜さは内部の劣等さを証し示しているのである。つまり外部は内部を表象する反射鏡だ。外部は内部の『有機的』な『相関物』であるというのだ。」（原:2010.103）とまとめる。このスペンサーの思想は、後に優生学の理論の大枠となっていく。

優生学は、生存競争、自然淘汰、進化、適合性といったダーウィンの『種の起源』（1859）における概念や、遺伝学を援用して、人間の身体的個別現象を「種」の問題として相対化するだけでなく、同じ方法で人間の社会や歴史文化も説明しようとするものである。原は、この社会や歴史文化を「進化」で説明しようとした過程について、「進化を主体的に促進する可能性というものが捏造されてくる」（原:2010.106.）と明確に示す。とりわけ「積極的優生学」と呼ばれる施策[5]では、人間が積極的に「進化」を推進させる側に立つことを説明する。また、原は19世紀後半から20世紀初頭の、アメリカにおける身体鍛錬[6]の称賛について論じる。原はこの身体鍛錬について、それが本来個人的営為であるはずにもかかわらず、そこで称賛される身体や健康は「理想的身体」「理想的美」として規格化され、基準値化されてゆくという重要な指摘を行っている。つまり、健康や美の規格化は、誰も[7]が「そうあらねばならないこと」としての身体状況を用意してしまうと言うことになる。このことは、生政治が求める「到達されるべき身体」を作り出すプロセスと同じ形式を持つ。

この「アプリオリに健康や美が存在する確信」は、西欧服飾史においてポール・ポアレの後に登場するデザイナー、マドレーヌ・ヴィオネ[8]の作品にも表れており、興味深い。ヴィオネのドレスは彼女の思想に

基づいて、古代ギリシアの理想的美の具現化が目指されていた。それは自然との調和であり、「ありのままの自分」と「肉体の解放」、「永遠に変わらない純粋美」がテーマであった。その理想的ドレスを作成するために、彼女は布地の特性の活用し、時にはリヨンの絹織物業者と協力しながら、軽く落ち様のすっきりした素材の開発を行った。また、裁断には「斜めの女王」と呼ばれるほどバイヤスカットを駆使し、素材の性質と合わせて弾力性と身体への適合を最優先にする工夫を行った。また、人間の皮膚には縫い目がないという主張から、自らのドレスから縫い目を追放するというような高度な縫製技術が用いられた。そして、人が着用しなければドレスの形にならないデザインの作品を発表し続け、“自然”な―アプリオリな身体の美しさの存在を主張した。

このようなヴィオネのドレスは、実はミロのヴィーナスに代表されるような古代ギリシアの大柄な細身の女性をイメージして作られた衣服であり、これはヴィオネがギリシアやローマの“理想の美”を前提に、「永遠に変わらぬ純粋美」つまり“普遍的美”への確信を持っていたからに他ならない。このヴィオネにとっての美の普遍性は、先に述べた優生学的理論から述べると「規格化」「基準化」された美であり、ヴィオネ自身も、この普遍的美はブルジョワ的厳格さによって担保されるべきものと考えていたことが、次の彼女自身の発言から分かる。「顧客の女性達には、自分のからだを大切にすること、つまり運動をし、きちんと健康を維持することを心がけて欲しい。そうすれば身体をいびつにしてしまうような人工的な鎧などいらなくなってしまうだろう」(『マリー・クレール』1937.5.28)。この発言からは、主体的に自身の身体を管理し「理想の美」「理想の健康」を獲得しなければ、私ヴィオネのドレスは着こなせない、そう主張していることが分かるのである。そしてこの主張は、規格・基準から外れた「理想的ではない身体」は、「そうであるべきこと」からの逸脱者として一括りにされ排除される不安を煽ることに加担していく。

一方、身体の規格化、基準化は近代以降の既製服産業の発展と関連して、我々の価値観、指向などを含有した生活そのものに深く浸透していくことになるが、身長、体重、胸囲、胴囲、背幅、裄丈、着丈、股下など、身体はあらゆる部分に一度分節化されて計測され、再び全体として統合される[9]ことになる。それぞれの部分には基準となるサイズがあり、その総体として再構築された身体が表出する。その際、自分の身体が基準サイズ（例えば既製服のサイズ）と適合しなかったことが判明すると、たいていの人は失望し、自分の怠惰な生活や不健康さ、醜さを省みて、次回へのリベンジ（もっとしっかりした身体の自己管理をしなければ！）を一度は考えてしまうのである。

これまでの議論をまとめると、まず健康は衛生観念と結びつき、人間の内面は外面に表象されるものという思考が定着していった。そして次にその内面の徳性がその外面に表象された“善き”身体が“美”の概念と結びつくことによって、「理想的美であること」がそれ自体社会における絶対的な善ととしてイデオロギー化されていく。そしてここで最も重要な問題は、身体の規格化よりも、規格外の身体を排除するという美のイデオロギーに向ってしまう問題であることを強調しておきたい。

3. 健康の可視化―データ化

フーコーは健康政策が保証する対象について「そこで問題となるのは複雑で多様な物質性であって、それは個人の「体」を越えて、彼らの生活を保証し、その活動の枠組みや結果を構成し、移動や交通も可能にするような、物質的要素全体を含んでいる」（フーコー:1979.286.）と述べる。そしてこの健康政策は「制度の総体として、そして計算された介入様式として、社会全体の「肉体的」要素を引き受ける」（フーコー:1979.286.）と示す。つまり健康政策は、個人の身体的現象である健康について、共同体全体の問題として管理することであると述べている。それは換言すれば、個人の健康を通した統治の方法（生政治 Bio-politics）であることを含んでいる。そして一方で、統治に利用される個人の健康は、美のイデオロギーと結びついて個人の徳性の“質量”へと再び還元されることも述べた。

以上を踏まえ、ここで検討したいのは、「健康であること」の可視化である。健康は、どのように可視化されうるのだろうか。それは“科学に裏付けられた”数値化に他ならない。フーコーは統治において人口統計学の重要性を述べているが（フーコー:1979.286）、科学への確信についても次のように述べる。

> *西欧社会のごとくいわゆる合理的なる社会が科学というものにいかなる権力関係の力学をゆだねているのかといえば、それは科学が単に真理とみなされうる命題の総体として機能するという点につきるものではない。それと同時に、一連の拘束力*

を持った命題と深いかかわりを持ったものでもあるのです。（フーコー:1978.74.）

そのディスクールは、単に過去ばかりではなく、人類の未来に対しても、ある真理の拘束力を波及させるという予言的な科学でもあるわけです。つまり、科学性と予言性とが、真理をめぐる拘束力として機能しているという点が重要です。（フーコー:1978.74.）

こうした科学の力学―とりわけ統計学の力学によって、現在様々な健康への施策が行われていることは周知の通りだろう。集められたデータは、それ自体が可視化されたものであり、その分析や統合の「結果」もまた可視化されることで把握され、施策への動機や根拠や対象となっていく。少子化、高齢化、生活習慣病などへの具体的対策としデータが活用されていることは広く知られている。同時に健康施策のデータ化は、個別の身体現象を自ら確認させることを可能とする。裏を返せば「健康の自己責任論」が問われることにもなるが、この問題についてはここでは深く言及しない。

個人の健康に関わるデータは、高度情報化社会の現代において、EHR（Electronic Health Record）やPHR（Personal Health Record）といった新しいディスクールを伴い、検討実施されている。『平成24年版総務省情報通信白書』の「第1部第4節　ICTイノベーションによる「課題解決力」の実証」では、「「新たな情報通信技術戦略」（平成22年IT戦略本部）における「どこでもMY病院」構想、「シームレスな地域連携医療」の実現の基盤となる、医療・健康情報を電子的に管理活用することを可能とする仕組である医療情報連携基盤（EHR: Electronic Health Record）の普及推進」が明記されている。また厚生労働省 健康局健康課「第1回国民の健康づくりに向けたPHRの推進に関する検討会（第1回）について」[10]の参考資料として添付された「厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会 健康診査等専門委員会報告書 令和元年8月」[11]も公開されている。そして、こうしたEHLやPHRを健康制度に組み込む動きもある。それは例えば、国立研究開発法人　日本医療研究開発機構/臨床研究課のパーソナル・ヘルス・レコード（PHR）利活用研究事業[12]であったり、一般社団法人日本生活習慣予防協会の具体的取り組み例[13]である郡山市での研究事業であったりする。

日本生活習慣予防協会のホームページはPHLとその事業について次のように説明している。

「パーソナル ヘルス レコード（PHR）」とは、患者の医療・介護・健康データを収集し、一元的に保存する仕組み。個人の健康に関する情報を1ヵ所に集め、本人が自由にアクセスでき、それらの情報を用いて健康増進や生活改善につなげていこうというもの。

病院・診療所や検査センターから取得する診察・検査データ、保険者保有の特定健診データ、薬局から取得する薬剤データ、自己測定による血圧や血糖、体重などの数値のほか、食事や運動、服薬などの行動についても、スマートフォンのアプリに記録していく。

スマートフォンやクラウドの普及とあいまって、PHRを本人の同意のもとでさまざまなサービスに活用することが考えられている。医療機関に提供すれば、医療の質の向上や業務の効率化がはかられ、患者はよりきめ細かい診療を受けられるようになり、医療費の適正化にもつながると期待されている。（一般社団法人日本生活習慣予防協会HP, 2019.9.1取得）

これらの事業のように健康に関するあらゆる個人データはデジタル化されて蓄積保管されている現状ができあがりつつある。集められた健康データは、個人に還元され、個人に健康であり続けることを要求するのである。これは、フーコーが指摘した18世紀健康政策以来の生政治による国民統治の方法として引き続き強化されながら我々を覆っている。それは同時に科学的なるものへの確信を基に推進され、身体を管理することになる。

4. 身体管理の方法としての「美容室」

ここまで、フーコーの生政治概念を援用しながら、18世紀以降の近代社会において、いかに健康は統治の中に組み込まれていったかについて述べてきた。また、一方で、健康が善とされることで、「美」という概念と結びついたことについても触れた。そこで、ここではある種のPHRを担う美容室の在り方について提言してみたい。なお、この提言は、松下友季栄のよる「美と健康が連携する新しい美容室の在り方」（平成30（2018）年度大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科化粧ファッション学専攻修士論文）の一部を基に考察を深めたものである。

はじめに、なぜここで美容室に着目するのか、述べておきたい。まず、美容室の数の多さである。日本国

内ではコンビニエンスストアよりも多いという点で多くの人々が利用できる施設であると言える。また美容室は、住宅街、オフィス街、商業施設等の生活のあらゆる場所に立地していることで、様々なライフスタイルをもつ人々に対して幅広く対応ができることを意味する。年齢や性別、地域差を問わず多様な人々が利用できるという利点も備わっている。

次に美容室では、美容師という人間の手で施術を受け、接客業としてのサービスを受けたり、コミュニケーションを深めたりする。そこは、来店する人にとって一般に心地よく、リラックスできる空間となる。リラックス効果と健康の因果関係についてはここでは述べることはしないが、健康への意識を高める―健康であることを意識する―には良い環境であると言える。

以上のように、美容室の持つハードとしての立地環境やソフトとしてのコンフォータブルな空間作りが、不特定多数の人々を対象とするとき有利に働くというのが、美容室に着目した理由である。この有利さとは、利用者にとっての利便性であり、親密性である。つまり、生活圏のどこでも、気軽に、定期的に通える場所、それが美容室の特徴であるなら、その場所で日常的な健康へのアプローチが可能なのではないか、それがこの提言の趣旨である。

実際海外では、床屋と医療が連携し、人々の健康改善に役立った例がある。例えばアメリカでは、皆保険制度が日本のように制度化されていないこともあり日本に比べ医療費が高額となり、そのため国民が個人で積極的に健康管理を行うことが必要だ。しかし、人種や民族、経済的地位等の影響から所得格差に連動して健康格差が問題となっている。この健康格差による問題に対してジョセフ・ラバネル医師[14]が、「床屋で地域を健康に」[15]というプレゼンテーションをTEDで行った。その内容とは、アフリカ系米国人男性の憩いの場である床屋を利用して彼らを健康へ導く提案である。その具体的なプロジェクトでは、まずラバネル医師らが、床屋で働くアフリカ系米国人たちに、来店する客の血圧の測り方、カウンセリングの仕方、高血圧の治療を行うために医療機関へ受診を促す方法を教えた。そして、その技術や意義を学んだ床屋たちがおよそ3年間店頭でそれを実践した結果、「床屋たちは何千人もの血圧を測り何百人ものアフリカ系米国人男性を医者にかからせ高血圧の治療を受けさせる」ことになった[16]。ラバネル医師は、このプロジェクトをアメリカで高血圧を抱えるアフリカ系米国人男性全員に行った場合、約一年で高血圧による心臓発作800件、脳卒中500件、死亡900件を防ぐことに匹敵する数値に値すると述べ、その意義を強調している。アフリカ系米国人が集う床屋をめぐっては、散髪だけではなく、人々が交流するための場所にもなっていることは広く知られており、それがラバネル医師の対策が有効的に行えた理由の一つである。

またラバネル医師は、アフリカ系米国人男性に、健康であることは健康であると感じるだけではなく、周りに健康であると思われることが大事であり、健康であると感じることと、見た目の健康には深く繋がっていることを伝える目的も持っていた。この目的は、根拠のない自己流の健康法ではなく、セルフメディケーションの定義に基づき、自分自身の健康を管理しなければならいという啓蒙だけでなく、むしろ「健康」を「可視化」させることが、個人の身体的にも社会的生活圏においてもそのQOLの向上に繋がるという意味が含まれているのではないかと考えられる。

ところで、このラバネル医師のプロジェクトは、美容室等の持つハードおよびソフトに着目した健康へのアプローチである。では、美容室や床屋の本来の目的である毛髪と健康との繋がりはどうなのだろうか。そもそも毛髪でどれほどの健康チェックが可能なのかという問いも生じる。それについて、毛髪について説明しておく。

毛髪の役割とは、まず脳を極端な高温や低温から守ることにある。脳は、人間の行動や言語・生命などを司る重要な組織であり、この脳が高温や低温等の影響を受けると、身体全体の生命バランスに異常が生じてしまうからである。さらに、外部からの衝撃から脳や頭皮を守る、感覚器・触覚器としての作用や、直射日光や有害な紫外線から脳や頭皮を守る。そしてあまり知られていないのは、毛髪には有害金属の排泄器官としての役割も持っているという点である。

これは、毛髪を通して身体の中に蓄積された水銀やヒ素・カドミウム・鉛・アルミニウムといった身体にとって有害な物質を体外に排出する重要な役割である。これらの金属成分と毛髪の成分のひとつであるシスチンは結合しやすい性質を持っているので、このシスチンが毛髪内部に金属を取り込んで体外に排出させるのである。

そしてもちろん毛髪には、ヘアスタイルなどで社会の中における個人を表現するツールの一つとして、社会的役割も担っている。

また、毛髪は一ヶ月に約1センチ伸びる。そのため、根元から12センチ先の毛髪には、一年前の健康情報

が残されている。このことから毛髪は、長期間の過去の情報を持つ生体で数少ない記憶媒体だといえる。そのことによって、長期間にわたる過去の健康の観察が可能になることは、毛髪のもつ重要なポイントだろう。

このような性質を持つ毛髪を使った新しい健康診断に向けて 2017 年 12 月から理化学研究所ほか、ヤフー株式会社や株式会社アデランス、島津製作所など民間企業、公益社団法人 18 法人が「毛髪診断コンソーシアム」の設立を発表した。目的は、毛髪を使った「非侵襲型」の診断システムを世界に先駆けて確立することである。これまでの健康診断では、血液や生体組織の採取など痛みを伴う「侵襲型」と、尿検査や血圧などの「非侵襲型」が利用されてきた。これらの検査では、1 日のうちでも飲食や運動などに影響を受けるため、時間によって変化する日内変動が課題とされている。採血のタイミングによっては健康状態を正確に反映しているとは限らないからだ。また自分では健康と考えていても疾病は徐々に進行しており、検査数値が基準値を超えた時に異常を感じる、すなわち疾病と診断される。異常値を示さない限り、疾病とはみなされないのだ。これに対して、毛髪は過去情報が記録された細胞標本であるため、身体の変化を時系列で追いかけることができる。毛髪診断は、「先制医療」[17] を実現する重要なツールになると期待されている。

理化学研究所等の研究から毛髪の組成分析によりいくつかの疾病との関連があることが判明した。「ある病気にかかると毛髪の組成に変化が起きることが報告されている。多くのがんでは、ヨウ素が増え、肝がんではカルシウムや銅、鉄の異常蓄積がおき、乳がんの石灰化の前兆現象として毛幹にカルシウムの蓄積異常がおこる。糖尿病では特定のアミノ酸量が増える。こういった世界各地で報告されている論文をベースに、疾患のバイオマーカーの特定と開発もターゲットになる。」（東洋経済 ONLINE, 2018.1.3）と記載されている。そのため、乳がんでは「ステージ 0」での早期発見も期待されている。生活習慣病関連では、糖尿病患者において特定のアミノ酸が毛髪中に多くなることがわかっている。今後この理化学研究所等の研究によってがんや生活習慣病だけではなく、さらに多くの疾患診断の可能性に期待できるだろう。そして、日本人の死因でがんに次ぐ心不全での心筋壊死の早期発見や、認知症の要因とされるアミロイドβタンパク質に関する代謝物、精神性疾患などの特異的なマーカーなども特定できれば、将来、様々な疾患の早期診断に応用することが可能になるのではないだろうか。

理化学研究所多細胞システム形成研究センター辻孝氏はこの毛髪診断に向けた研究について、「将来、医療向け健康診断システムにできれば、国民が検診センターや病院に行くことなく、自分の健康状態を把握できる仕組みを構築したい」（薬事日報, 2018.1.12）と述べている。

では、こうした毛髪による健康へのアプローチが可能になっていることを踏まえ、日本における健康と美容室が連携する現状について検討してみたい。

現在、毛髪が持つヘルスケア情報をもとに、美容室でカットだけではなく、不足栄養素がチェックできるサービスが可能となってきた。「いこらぼ」[18] は専門検査機関と提携し、美容室でしたカット毛髪（約 100 本）を分析し、体内の不足している必須ミネラル 12 元素や基準値よりも多い有害金属 5 元素を検査できる WEB サービスである。顧客は、このサービスを受けられる美容室に来店し、スマートフォンで「いこらぼ」の登録を行う。カットした毛髪を専用の袋（会員 ID を記入）に入れ、美容室が専門の検査機関へ送る。検査結果は 3〜4 週間後にサイトで確認できる。不足しているミネラルや基準値を超える有害金属からそれらが多く含まれる食材から懸念される病気などを解説してくれるサービスである。働き盛りの 30〜40 代の人や、忙しく時間がないことを理由に自身の体に目を向ける事が出来ていないという状況に陥っている人は多く存在している。そのため、身近にある美容室で、時間を取る必要もなく健康チェックができるサービスは、現代人にとってとても便利であり、定期的に健康診断を受ける機会が少ない美容師にとっても有効的である。そして、美容業界においても大きなイノベーションに繋がるサービスであり、まさに先に述べた PRH を組み込んだプロジェクトの例として上げられるだろう。一方、美容室はそもそも「きれいになる」「身なりを整える」という要請に応える場であることも忘れてはならない。美容室で健康についてアプローチしやすいのは、利便性、親密性のほか、「目に見える形」を供給するという特殊性を検討しないわけにはいかないだろう。例えば「健康」になれば丈夫な毛髪が生え、希望するヘアスタイルの幅が広がる、「健康」になれば肌の色艶が良くなり、メイクアップを楽しむことができる、「美しく」変われば、気分が良くなり、外出や人との関わりに対して抵抗感が減少する、などは多くの人が生活実感として経験していることだろう。そして「健康」によって「美」を獲得し、自らの気持ちが高揚する体験は、「健康」と「美」の両者を維持する

ために身体へのケア・管理（お手入れ）への意識を想起させることになるだろう。つまり健康と美の体験が、さらにそれ以上の健康と美を求めさせるという果が期待される。このことは、「健康」を「美」として「可視化」させた実例と言えるだろう。

先に健康のイデオロギーとして述べたように、健康と美がアプリオリに連携している社会において、美容室はそのイデオロギーを体現させる場でもあると言えよう。

日本は、世界最高水準の平均寿命を達成し、2018年の高齢化率[19]は28.1%にまで上昇、2065年には38.4%に達し、国民の約2.6人に1人が65歳以上の者となると予測されている（内閣府,『令和元年版高齢社会白書』）。そのため日本は、健康長寿社会の解決に向けた世界的なモデルになれると考えられており、世界最先端の医療や早期診断システム、健康サービスなど高付加価値型の産業の創出、生活習慣病や認知症の予兆を発見できるバイオマーカー・リスクマーカーの研究・開発の促進が国策として位置づけられている。医療費は増加の一途をたどり、国民医療費抑制や社会保障費の充実は、未来に関わる大きな課題となっている。このような背景をもつ我が国にとって、手軽に利用できる毛髪診断によりヘルスケア情報を手に入れることは、セルフメディケーションを行うことが容易になり、その結果ポピュレーションアプローチ効果への期待が高まると考えられる。

手軽に毛髪診断を行うことで、利用者がヘルスケア情報を得ることが可能となりつつある今日だが、この毛髪診断システムをなおいっそう発展させるには、美容業界と医療機関や地方自治体などとの連携が必要不可欠だろう。例えば、毛髪診断の結果が医療機関と情報共有できる仕組みである。例えば現在、兵庫県伊丹市では「いたみ健康・医療相談ダイヤル24」が存在し、看護師・保健師・医師などが24時間・年中無休体制で相談に応じ、分かりやすくアドバイスを行っており、伊丹市民のみ利用が可能なシステムとなっている。このような医療機関や自治体等と連携があれば、利用者がヘルスケア情報を把握し、その先にある自分で自身の健康を管理することへの見通しが良くなり、健康に対して安心して向き合えるだろう。自分の診断データで気軽に現在の健康情報が得られるだけではなく、医療に関する専門知識を持つ人が、人々の身近に存在し、生活の一部として日常的に健康相談等が可能な場が存在することは重要である。しかし課題は少なくはない。特に、医療と地方自治体が作ってきた既存の連携の中に、美容室という異業種が組み込まれる、そこでの協働は、その方法も含め今後の大きな課題でもある。

しかし、医療と地方自治体と美容業による新しい連携が確立すれば、美容室で毛髪診断を行うことに、ヒトと医療機関の間に地域コミュニティが加わることになる。つまり、美容室とは、地域住民が集い、そこではいわゆる世間話や生活に密接した情報交換が行われる小さなコミュニティである。その小さな生活コミュニティが健康政策と繋がることにより、すでに病気に悩まされてる人だけではなく、健康な人や健康を取り戻した人たちにも、日常的・継続的に健康意識を高め、自身の健康に対して向き合う環境づくりが整うことになる。繰り返しになるが、美容室の利点は医療機関に比べ、定期的に通うことにも利便性があり、性別や年齢に限らず、希望すれば誰もが利用できるということ、それは、すなわち従来の健康施策システムの隙間からこぼれ落ちる人を拾い上げる目的を果たす効果が期待できるのである。

これまで日本は、健康寿命を延ばすために様々な政策を行ってきた。今後、健康寿命に加えその先にある「美容寿命」にも、人々は注目していくのではないだろうか。いくつになっても、自身の見た目に興味を持ち、外出することや人に会うことにためらいもなく、元気で溌剌に生活できる期間を延ばすことで、「健康」と「美」の循環を創り出すことができるのではないだろうか。この循環とは、言い換えれば、「健康」が「美」という形で「可視化」されることで得られる人びとの外見と内面への満足―QOLの向上―を維持し続けることの出来る一つの形式だと言えるだろう。

5. おわりに

本論では、我々は健康をどのように可視化してきたのか、身体への近代的まなざしの有り様について検討してきた。まず、フーコーの生政治概念（Bio-politics）を援用し、個人の身体的現象が、国家の統治制度に組み込まれることで、身体は共同体（国家）の視座から管理される対象になったことを論じた。

次に、その生政治による統治は、衛生学的ユートピア思想を生じさせ、清潔や健康が「美」の概念―善きもの―と結びつくことについて述べた。つまり、「清潔であること・衛生的であること」と、「そうではないこと」が、その共同体における善悪の明確な弁別になり、「衣服・身体の汚れ」は視覚メディア装置が大きく発達する19世紀において、文字通り目に見えて

明確な人間弁別の方法なったことについて論じた。そしてその結果、「健康」と「美」は一つのイデオロギーとして我々の社会価値を方向付けることになったことを明らかにした。

次に、「健康」を統治に組み入れるために、健康を可視化―データ化―する方法の発達について述べた。近代における科学への確信は、とりわけ統計学を用いた統治を推進し、あらゆる生活現象が数値化―データ化―されることを述べ、現在の PHR や EHR などに連なっていることを説明した。そこでは身体は健康数値として可視化され、個人の身体的現象は一方では施策に管理されながらも、一方で個人としても自己管理を要請される存在になっていることを示した。

そして、その自己管理されるべき身体について、美容室という場を提供してはどうかという提言を行った。美容室の持つ利便性、親密性という特徴は、「健康」と「美」がアプリオリに連続しているという価値観を発生させた現代社会において、人々を呼び込みやすい場であることを説明し、人々の身体の「健康」管理を促進させる、美容室の社会的役割可能性について検討した。またそのことを通して美容業自体の社会的責任と貢献を拡大させる可能性についても触れた。

以上の検討から、「健康」は、近代以降の国家統治に組み込まれることで、個人の問題から国家の問題へと変換されたことを明らかにした。そしてその過程で、身体は個人のものから共同体のものへと変換されていったことも確認できた。また健康政策実行のために「健康」は数値化され可視化されていったが、これは一方で優生学的理論に基づく「健康から排除される身体」を創り出すプロセスであることも述べることができた。

視覚メディアが社会価値を生み出す近代以降、「健康」という肉体の問題は、人間の“徳性”と結びつくことで外見の問題にすり替えられ、「美」という「社会善」として受け入れられていると言えるだろう。そしてそれが求められている状況では、「健康」に対する「可視化」がより一層強調される社会になると考察できるのである。

註

1) 世界保健機関（WHO）憲章は、1946 年 7 月 22 日にニューヨークで 61 か国の代表により署名され、1948 年 4 月 7 日より効力が発生した。日本では、1951 年 6 月 26 日に条約第 1 号として公布された。
2) フーコーによれば「公安」とは「つまり『国内のことに関わり、国家の勢力を確立、増大させ、その力を正しく用い、その臣民の幸福を提供しようとする法律や規則の総体』。」
3) ポール・ポワレ 1879～1944 年。ジャポニズムの影響を受け、着物のイメージをファッションデザインに採用し、ゆったりと身体を覆う服を発表。これが後にファッション史上「コルセットの排除」と呼ばれ、近代服飾史のエポックとなる。ポワレのデザインは、コルセットが作る人為的ラインのスタイルとは異なるデザインの提案し、20 世紀初頭の女性が軽快な服を好む風潮と合致した。
4) スペンサーは「一般的には、ダーウィンの進化論の擁護者で、本来、生物界を対象としていた進化論を、社会や文化といった領域へ適用した人物と言われる。後年、社会進化論（ソシオ・ダーウィニズム）と呼ばれるようになる思潮の創始者のひとりである」（原:2010.94.）とされる。
5) 原はその具体例として、優性保護的対策、少子化対策、優生結婚促進、ほかに優良児制度、優良家族コンテストなどを挙げている。
6) 体操、食餌療法、健康管理、美への鍛錬を有機的に組み合わせた身体管理。それにより健康、正常さ、適合性、美しさが回復され獲得されるというプログラムであると原は説明する（原:2010.107）
7) 原は「清潔で衛生的な文明生活を送る者ならば、誰しも」と述べている。
8) マドレーヌ・ヴィオネ 1878～1975 年。1920～30 年代のパリモードの中心的デザイナー。
9) 身体の分節化は、医学においても同様で、外科内科のような大きな枠組みだけでなく、消化器内科、循環器科、消化器外科、整形外科、歯科、神経内科、産科、小児科などのように、より専門化が進むほか、細胞や遺伝子治療の研究も進み、もはや総体としての人体は置き去りにされているかのようでもある。
10) https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_06700.html
厚生労働省 健康局健康課「第 1 回国民の健康づくりに向けた PHR の推進に関する検討会（第 1 回）について」
11) https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000546719.pdf
12) https://www.amed.go.jp/program/list/05/01

/005.html 日本医療研究開発機構の HP によると祖事業概要は次の通りである。「超高齢社会に突入した我が国においては、社会保障費の増大や生産年齢人口の減少等、様々な課題に直面しています。課題の解決には、国民の健康を維持・増進し、健康長寿社会を実現することが有効であり、ICT の活用による地域の医療機関や介護事業者のネットワーク化とともに、個人の健康・医療・介護データを EHR（Electrical Health Record）等から本人に還元し、本人の意思に基づくデータの管理・流通・活用を可能とすることで、本人の望む様々なサービスを受けられる環境を実現することによる健康・医療・介護サービスの質の向上等が必要です。更に、本人に還元された健康・医療・介護データ（PHR: Personal Health Record）を利用したサービスを通じて本人がメリットを実感することで、時系列の PHR が集積され、臨床研究に活用されることによる、我が国の医学の発展への寄与も期待されています。本事業では、個人の健康・医療・介護情報を時系列的に管理できる PHR 機能の実現のための技術的課題の解決等に向けて、情報連携モデル及び情報連携の在り方についての研究を推進します。」

13） 一般社団法人日本生活習慣予防協会の HP「2019 年 05 月 31 日広がるパーソナル ヘルス レコード（PHR）への取り組み　郡山市で研究事業を開始」 http://www.seikatsusyukanbyo.com/calendar/2019/009881.php

14） TED 世界的講演会「TED Conference」を開催している非営利団体で発表した黒人医師。

15） Joseph Ravenell, *How barbershops can keep men healthy*, 2016.2, TED（https://www.ted.com/talks/joseph_ravenell_how_barbershops_can_keep_men_healthy 2019.9.1 取得）

16） https://www.ted.com/talks/joseph_ravenell_how_barbershops_can_keep_men_healthy/transcript#t-656415

17） 個人の遺伝子、mRNA、タンパク質、代謝産物、画像等のバイオマーカーを用い、将来起こりやすい病気を疾患の発症前に診断・予測し、介入するという予防医療である。

18） 株式会社イデアシステム「美容室からウェルネスを」を目的とした新サービス。2019 年 4 月 3 日から開始。

19） 65 歳以上人口が総人口を占める割合

参考文献

・M. フーコー（中島ひかる訳）、「十八世紀における健康政策」『フーコー・コレクション－6 生政治・統治』、1979＝2007、ちくま学芸文庫
・M. フーコー＋吉本隆明、「世界認識の方法―マルクス主義をどう始末するか」『フーコー・コレクション－5 性・真理』、1978＝2006、ちくま学芸文庫
・北山晴一、『おしゃれの社会史』、1991、朝日選書
・深井晃子、「身体の夢―20 世紀の身体イメージとファッション」『身体の夢―ファッション or 見えないコルセット』、1999、京都服飾文化研究財団
・橋本周子、「〈太った身体〉の是認―十九世紀前半のフランス、ガストロノミーの時代」『身体はだれのものか―比較史でみる装いとケア』、2018、昭和堂
・原克、『美女と機械―健康と美の大衆文化史』、2010、河出書房新社、
・松下友季栄、「美と健康が連携する新しい美容室の在り方」、2018 年度大阪樟蔭女子大学大学院人間科学研究科化粧ファッション学専攻修士論文

参考資料

・国立研究開発法人　日本医療研究開発機構　臨床研究課、「パーソナル・ヘルス・レコード（PHR）利活用研究事業」、（https://www.amed.go.jp/program/list/05/01/005.html 2019.9.1 取得）
・一般社団法人日本生活習慣予防協会、「広がるパーソナル ヘルス レコード（PHR）への取り組み　郡山市で研究事業を開始」、（http://www.seikatsusyukanbyo.com/calendar/2019/009881.php 2019.5.31 更新）
・厚生労働省 健康診査等専門委員会、「厚生科学審議会地域保健健康増進栄養部会 健康診査等専門委員会報告書 令和元年 8 月」、（https://www.mhlw.go.jp/content/10904750/000546719.pdf 2019.9.1 取得）
・内閣府,「令和元年版高齢社会白書」、（https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/zenbun/01pdf_index.html 2019.11.22 取得）
・ジョセフ・ラバネル、「床屋で地域を健康に」、2016、Feb., TED、

(http://www.ted-ja.com/2016/08/joseph-ravenell-how-barbershops-can.html 2017.11.20 取得)
・朝日新聞 DIGITAL、「病は毛から…髪で健康診断、理研やアデランスがコラボ」、2017.12.28.朝日新聞社
・東洋経済オンライン、「健康データ『毛髪』の秘められた可能性」、2018.1.3., 東洋経済新報社
・薬事日報、「毛髪診断でコンソーシアム設立－1万人のデータベースを構築」、2019.8.19.、薬事日報社
・兵庫県伊丹市ホームページ、(http://www.city.itami.lg.jp/ITAMI_BENRI/KOSODATE_KYOIKU/1534816561250.html 2019.8.22.取得)、兵庫県伊丹市
・日テレ NEWS24、「美容室で不足栄養素がチェックできる！」、(http://www.news24.jp/articles/2019/06/27/06457558.html 2019.8.22 取得)、日本テレビ

Modern Society and the "Visibility of Health": The Modernistic View of the Body through Bio−politics

Faculty of Liberal Arts, Department of Beauty and Fashion Studies
Saeko KAWANO
Osaka Shoin Women's University Graduate School
Graduate school of Human Sciences
Division in Beauty and Fashion Studies
Yukie MATSUSHITA

Abstract

This paper discusses "visualization of health," and the perspective of the body in modern society based on the Bio−politics theory of Michel Foucault. Above that, this paper considers that the governing systems grasp on the individuals' physical conditions; as a result, the body becomes an object for national control.

Next, this paper confirms that Bio−politics causes a "utopian" policy of hygiene, and cleanliness, and health connects to "the beautiful", or "proper way", in our society. As a result, it leads to social values like eugenics, and people valuing "health" by statistics.

This paper proposes a new health measure: the combination of beauty and health at hair salons. The result of these discussions indicates that recent modern society gets essential values from visual media, and health issues transform into appearance issues. Therefore, body issues become "the social norm".

Keywords: Body, Bio−politics, Healthy, Visibility, Hair−salon